

焼締作家 篠原 希さんを訪ねて

今回の個展開催にあたり信楽にある篠原さんの工房を訪問してきました。

篠原さんの陶芸を始める事になったきっかけ、信楽の土へ込められた思い、穴窯やトレインキルンについたっぷり独占取材を行いました！



(写真：篠原さんの工房の入り口にて)

— 篠原さんが陶芸の道を進まれたのは、どのようなきっかけがあったのでしょうか？

篠原：そうですね。父は普通に働いていましたし、僕の実家は家から20歩で駅に着く様なすごい都会でした。だから周りに物作りをする人なんて誰も居なかったですね。

僕は3人兄弟の真ん中で、兄も弟もよく勉強ができたのに、僕はおちこぼれで父にはよく「お前はまずは机に座るところから練習だ！」と言われ、兄弟が横で勉強する中、僕はひたすら机でプラモデル作ってました(笑) でも今思えば小さい頃から物を作る事が好きでした。

高校を卒業して進路に悩んでいて、実は大工の道に進もうかな？なんてぼんやり考えていたんです。両親は大学は行きなさいって感じだったから、富山の方の建築学校に行こうかなって考えていたんですよね。でもちょうどその時に陶芸の森が出来て連日テレビで陶芸の特集がされるようになって初めて陶芸と言うものを見たんです。それまで焼き物が土を焼いたものなんて考えてもみなかった。そんな事もあり、「陶芸っていったいなんぞや？」と思い、信楽に来て、そこで僕の師匠になる古谷信男先生に会ったんですよ。本当に素敵なお人だった。

— 古谷先生のどういうところに惹かれたのでしょうか？

篠原：人柄ですね。揺るがない真実っていうのかな。嘘を本当に全然つかず、まっすぐな信念をもっ

桃青

て生きている人だと思いました。だから先生じゃなくて他の誰かだったら僕はすぐに辞めていたと思うんだよね。19歳の何も知らない僕に、奥さんと一緒に焼き物について色々話してくれて、その時に感じたんですよ。あっこの人は嘘をつかない人だって。それが僕が陶芸を始めたきっかけでしたね。あと、人柄って作風にでると思うんですよ。先生の作品は本当に素敵だし、あれからだいぶ経つけど、先生は今も信楽で指よりの人気作家ですからね。先生には本当に良くしてもらいました。薪割りとかチェーンソーの研ぎ方から、土の作り方まで。都会育ちの19の僕だよ？何もできる訳ないじゃないですか。でも本当に丁寧に一から教えてくれて、それが今本当に役に立っていますね。

— 大工さんへの道ってというのは信楽に来られてすぐにふっきれていたんですか？

篠原：いや、そんな事ないですよ。5年に一度男ってというのは迷う時があるっていうじゃないですか(笑)これでいいのかなって悩む事がありましたよ。初めはプラスチックや漆器も全部同じに見えていたし、物作りの仕事に関わられて良かったという程度にしか考えてなかったですね。陶芸が本当に面白くなってきたのは5年くらいしてから。好きになればなるほど、見えるものっていうのも増えてきたんです。例えばこの茶色(壺を指しながら)が今まではただの茶色にしか見えてなかったけど、今は色の見え方とか質感の深みとかそういう視野が広がってきたんです。ある日突然、今までこう見えてたものがドカッと変わるというのがあったんです。遠くからみても質感がわかるようになった時なんておもしろかったですね。

— 大きく見え方が変わったと実感したのは何年くらいですか？

篠原：何年くらいですかね？穴窯を使い出して10年くらいかな？穴窯を使うには素材を十分知る必要があるから、そうすると土の見え方が変わってきて、そして焼いてみて、焼いた素材がどんなものになるのか理解を深めていく感じですね。

—使われている信楽の土について教えてください。

篠原：花崗岩が風化してできた、長石を多く含む黄瀬の土と、黒く、微粉末の炭素を多く含む、木節粘土、その他にもいくつかの土をブレンドし合計5種類くらいの土をブレンドして作っています。特にその中でも木節粘土っていうのが面白く、世界的に見ても信楽や瀬戸でしか見つからないような大変珍しい土なんです。粘土ができる際に湖の底にいろんな堆積物が重なり、粘土化されていくのですが、その中にも木や枯れ葉もバサバサと入り、炭素化され亜炭という石炭のなりそこないみたいな物質になるんです。それが微粉末として粘土にまざると、色的には黒くなる。でも炭素なので焼くと

桃青

白くなるという土なんです。この微粉末は焼く事で土の中に気泡が生まれ熱衝撃に強い器を作る事が出来るんです。だから僕は土鍋も作ります！



(写真 左：木節粘土、右：黄瀬の土)

その土の素材そのもので何ができるか、この土が一番カッコよくなるのはどんな作品かってそれを一番に考えています。海外へ行ったり来たりする人はみんな僕がそんなんだって知っているから、いろんな土を世界中からどんどんもってくるんですよ（笑）これはアフリカ、ネパール、ベトナム、ラオス、ブラジル、アメリカ...

—この土を信楽の土にブレンドしたりもするのですか？

篠原：いや、まず初めにこの土だけで何をつくるかっていうのを試してみるかな。

もしそれだけで使えなかったら、ブレンドしてみたりするかな？まずは素材だけでどんなことができるのかを知ることが大切。

—素材そのものの大切さですね。

篠原：そうだね。今は信楽焼を作りたいって作ることも多いですね。その為に長石が多い土を選ぶとか。それくらいブランド土になっているんです。信楽の土はゴツゴツしたいろんな成分が組み合わさった奇跡の土なんです。批判するつもりはないけど、その荒々しい土からこの成分はちょっと扱いにくいから、これを除去して、これを足してというのは違うと思うんだよね。あくまでも土があつての作品ですからね。

桃青



(写真: 篠原さんの工房に並ぶ様々な土)

— 作品によってそれぞれ違う土を使われるのでしょうか？

そうですね。使う土はそれぞれ違いますね。この前も近くでものすごい荒っぽい土が取れたんですよ。手捻りもできないくらいの荒っぽさ。ろくろなんてもちろんかけられない。

でもくり抜いて焼くと、ゴツゴツして、バシッと締まってとてもカッコいいお茶碗ができるんですよ。だからこれはお茶碗専用って決めましたね！これを作りたいからこの土を選ぶっていうんじゃなくて、この土だから出来る作品は何かっていうのを一番に考えたいんです。

このあと篠原さんの工房から車で20分くらいの穴窯へご案内して頂きました。

— 意外と小さい窯なんですね。

篠原：そうなんです。こんな小さい窯じゃあ、何も焼けないよって先輩に初めはよく言われたよ。物理的に大きい窯の方が安定した作品を大量生産するには向いているんですけど、それじゃ面白くないじゃないですか。この小ささだからこそ、薪と灰との関係性がダイレクトに反映されて、難しいけど、だからこそ出せる味があるんです。だからこの大きさがいいって僕は思っています。でも窯詰めはめちゃくちゃ大変ですよ。窯詰だけで丸2日かかりますから(笑)

桃青



(写真: 篠原さんの穴窯)

— 本焼きはどれくらいかかるのですか？

篠原：昔は1週間くらいしていたけど、今はいろいろと試して無駄を省いて4日ほどかな？

だいたい3日くらいで1275度から1280度に到達して、それをギリギリまでひっぱる感じかな。この温度に到達してやっとなが灰が溶けるっていう現象が起き始めますからね。

昔は温度計や何本薪をいれたとかそういう事からどれ位焚いたらいいのかとか考えていたんですけどね。結局それじゃあダメなんです。カッコいい壺を作りたいなら、その壺を見ないといけないんです。

— 焼いている最中の赤い炎で包まれた壺をどういう風に見て判断されるのでしょうか？

篠原：鉄の棒があってそれを作品の近くにもっていくんです。そこで温度がまだ低い状態だと、その鉄の棒の反射の線が細くて、完成直近って時はその反射の線が太くなる。それを見て決めます。引き出し作品もそうやって見極めて、引き出しています。

引き出す目的は、窯内での究極の還元状態を止める事が目的。そうする事で究極の還元状態でできた青色をその状態でストップさせる事が出来るんです。窯の中で灰がブワーと溶けていても、引き出した瞬間、外が何度であろうが、温度は一気に下がるのでその溶け出して流れている灰もピタっととまるんです。これで色と流れが止まるというわけです。

桃青



(写真：鉄の棒を使って作品を取り出す様子)

—すごいですね！想像もできなかったです。その鉄の棒にひっかけて出される際に落としてしまう事ってないのでしょうか？

篠原：えっそれがこれこれ。(近くに落ちていた徳利の破片を見せてくれながら)よくありますよ(笑)
昔はすごい炎なんで窯の前に立つのも怖かったですよ。でも、僕らがしているのは、薪くべ大会でも、温度上昇大会でもなくて、ただただ格好いい作品を作りたいだけだから作品自体の状態を見ないと始まらないんですよ。

— 温度が高くなってからなので後半の方がかなり忙しくなるっということですよ？

そうですね。昔は“あぶり”という薪の湿気を飛ばす作業から本当に不眠不休で焚いていたんですよ。でもそれだと、後半大事な時に疲れてもういいやってなっちゃうんで、、、今はあぶりはバーナーでして、一度寝てからスタートできるようにしています。体力勝負ですからね。また今は奥さんも手伝ってくれて寝られるようになったので、引き出し作品も沢山出せるようになり、本当に助かっています。

—薪の種類にもこだわりがあるんでしょうか？

篠原：松だけで焚いているっていったら格好いいのかもしれないけど、昔の信楽で松だけで焚いているなんてありえないと僕は思うんです。それは信楽の景色をみたら一目瞭然。この山の景色みたらわかりませんか？松だけじゃないでしょ？実際使用する松の比率は4割くらい。広葉樹のチタンを多く含むコナラや、竹なども混ぜても焚いています。竹は油を含んでいて面白い景色がでるんですよ。

桃青



(写真：穴窯の外に積み上げられる薪)

—信楽の景色のまま焚いているというのはその土地に正直で素敵ですね！

— 窯焚中はどちらにいられるんですか？

こちらの控え室のようなところで休んでいます。

また奥に仮眠室もあります。奥の方はもっとちゃんとした部屋ですよ（笑）

あと、ここは檜風呂！窯焚中に入るお風呂めちゃくちゃきもちいですよ。

この後は陶芸の森に篠原さんが自ら作られたトレインキルンを見に行かせて頂きました。

—トレインキルンの構造について教えてください。

トレインキルンはアメリカの平地に作られる薪窯です。燃烧室が上に位置していて作品室と分かれているのが大きな特徴です。初めて薪窯を使う学生さんでも安定した作品を作ることができると言われています。この上部の燃烧室に薪をいれて熾もそのまま下に落ちるので詰まることがないんです。面白いのが炎の動きで上から下へと流れます。作品も真ん中の胴体部分に入れるだけで、窯入れ、窯出しもとても簡単。ここに蓋をして、窯の後部にあるダンパーを閉じてしまえば密封も簡単にでき窯の気密性っていうのがすごく高くなるんです。

桃青

あと一見、少しかっこ悪く見えるこの土台のコンクリートブロックも、湿気や熱と窯を分離してくれる大切な役目をしているのですよ。



(写真：滋賀県立陶芸の森に篠原さんが設置したトレインキルン)



(写真：トレインキルン の土台)

—篠原さんがトレインキルンを知ったきっかけはなんだったんですか？

もともと独りよがり「信楽はいいんです」とは言いたくなかった。ちゃんと自分の言葉で伝えられるようになりたいと思い、2017年にアメリカに渡ったんです。その時は現地の土に触れて、現地の窯で、現地の気候で焼いて、いろいろ見ることができたけど、当時アメリカで流行っていたトレインキルンは見ることができなかったんです。それで帰国して2年くらいたってから現地で出会ったスタンフォード大学の教授マブチ先生が、といってもスタンフォード大学教授というのは後で知った話なんですけど、連絡をくれて、“トレインキルン で窯焚するから一緒にしようよ”て呼ばれたんです。それで設計士の方いるユタ州立大学の教授のところまで行ってきたんです。

— トレインキルンでしかできない作風っていうのはどういうものですか？

桃青

火の動き方によるものだね。穴窯とトレインキルンでは火の流れ方が全然違う。火は上下、前後に流れるから、穴窯ではできない景色、色が表現できます。あと還元冷却という技術もトレインキルンでしかできない。焚きながら冷やしていくっていう焚き方ですね。同じ土を使っても穴窯では火色がでて、トレインキルンでは綺麗な燻銀が出ているお茶碗もあります！



(写真：トレインキルンで還元冷却で作られたお茶碗)

ー どうやって冷やしていくのでしょうか？

一定の温度になってから湿った薪を横の小さな窓から入れていくんです。僕の穴窯ではできない事だからワクワクしましたね。

ー トレインキルンで1300度になるのはどれくらいかかるのでしょうか？

穴窯ではだいたい3日くらいかかるけど、トレインキルンは朝の10時から初めて、その日の夜の11時にはもう1300度になっていましたね。それも一本も松を使わず、その辺の雑木とかびちゃびちゃの薪とかで。この窯のあたりが掃除できてすっきりしちゃいましたね（笑）

トレインキルンを築窯するのはどれくらいかかったのでしょうか？

滋賀県立陶芸の森の県民講座としてさせて頂いていたのですが、コロナの影響で制作日が延期になったりしましたが、実際にかかった時間は10日くらいかな？構造自体は簡単なものなので。

桃青

—どうしてトレインキルンを日本で再現しようと思ったのでしょうか？

篠原：薪窯って不眠不休で焚くから偉いみたいなんあるじゃないですか。他の地域の焼締は2週間本焼きをする場合もあるじゃないですか。でも他が2週間本焼きするから、僕の4日の作品が良くない訳じゃない。もっと言えば、電気窯はスイッチを押すだけだからダメって言う訳じゃないじゃないですか。僕がどんだけ寝ていないかなんて作品の良し悪しに関係ないんですよ。だって困りません？この壺めちゃくちゃ高いんです、だって僕丸4日寝てないですもんって言われても。だからトレインキルンを再現して実際に比較対象できるものが欲しかった。トレインキルンは気密性も高いし、効率もコストパフォーマンスも良いと言われています。でもじゃあコストパフォーマンスって何って話じゃないですか。コストパフォーマンスがいいとされる窯で本当にいいものが一つもできなかったら本当の意味でのコストパフォーマンスがいいとは言えないでしょ。

僕が作りたい作品っていうのは僕のあの小さな穴窯を使ってしかできない。でも僕が穴窯を使うのは、不眠不休に価値を見出しているからではなく、土の性質を最大限に活かせるのがあの穴窯っていうだけで、道具でしかないんです。もし電気釜で土の性質を最大限に活かせるなら僕は電気釜を使いますよ。

それぞれの窯にはそれぞれの良さがあり、その窯でしかできない事があるんです。だからどこの地域の焼締よりも僕のものがいいとか、トレインキルンや電気窯より穴窯がいいとか、そういう事を言うつもりは一切ないんです。ただそれをちゃんと説明できる様になる必要があったんです。

このあと篠原さんの工房に移動して更にお話しをお伺いしました。

—篠原さんが作るのが好きな作品というのはあるのでしょうか？

壺をカッコよく作りたいですね。この壺には僕の窯から出てくる全ての色が出てますからね。窯の中で出てくる色を作品に映し出したっていうのが一番ですからね。これは信楽の土でないと、僕の穴窯じゃないとできない事なんで。穴窯はトレインキルンと違って薪の影響をダイレクトに受けます。壺は窯詰の時に一番最後に入れるんですけど、どの位置にするかっていうのは本当に難しくて、壺を置く位置を決めるだけで2、3時間は余裕でかかりますね。

桃青



(写真：篠原さんの穴窯での色が全てでていう壺)

いくつか目標があって、僕が窯変と呼んでいる作品をまぐれで作るんじゃなくて、性質を理解して、ちゃんと狙って作れるようになる事。そして次はそれを花入れや壺で再現する。そして次は手のひらにこの壺の景色が現れている作品があれば最高じゃないですか。だからそれをお茶碗で再現すること。そして今度は更に小さいぐい呑で同じように全ての景色を表現する。中でも一番難しいのはお茶碗ですね。お茶碗は正面が作品の形で決まっているから、景色の正面とお茶碗の形の正面を合わせないといけないので、なかなか難しいんですよ。

他は陶匠ですかね。始めは同じように壺の景色をお皿に移すっていう形でやっていたんですけど、お皿だとやっぱり、裏表があって、どんだけカッコいい景色がでていてもそれが裏だとお皿だと使えないのでそれが惜しくて、だから陶匠にしたんです。陶匠って高級料理屋さんで使われるイメージだけど、僕の作品はどんな家庭でも単独にお皿としても使ってもらえる様に作っているし、尚且つ表と裏の景色を楽しんでもらえるようになっています。



(写真：篠原さんのお気に入りの陶匣)

—今と昔で変わった事がありますか？

窯焚って焼締作家にとって大事ですけど、焼いていくうちにできた、凄く出来の良い作品っていうのは奇跡じゃダメなんですよ。さっきも話したけど、どうやってその奇跡がつくり出されたのかちゃんと再現できないと一人前の作家っていけないからね。だから俯瞰逆算をしっかりとる。この作品にどうやってこの奇跡が起こったのかっていうのを、昔よりかは分かるようになった気がします。

—今まで陶芸をされてきて一番大変だった事はなんですか？

初期は本当にお金がなかったですね。個展をしても支払いがあるのは2ヶ月後とかなんで、なんとか早く支払いをしてもらえないか必死にお願いしたりもしました。結婚して奥さんもいるのに、2ヶ月収入がない事だってよくありました。また自分の窯を作ろうとした時には近所でボヤがあってその片付けに追われ窯作りが1週間くらい遅れて、個展は迫っているし、もう1週間くらい寝ずにぶっ通し動いて、個展に間に合ったもののその時の個展の記憶がないんですよ。謎の高熱で倒れたりもしましたし。でもそれくらいやりたかった事なんですよ。大変ですねって良く言われるけど、ただただ面白いからやっているんです。

—挫折や、くじけそうになってしまった事もありますか？

そうですね。僕10回は穴窯で焼こうって決めていたんですよ。何もわからないし、失敗するのは当たり前だし、でも10回は焼こうって！10回焚いてもダメだったらやめようって思っていたんです。初

桃青

窯もさっきいったように失敗したし、死ぬかと思いましたよ。それからもずーっと失敗するんですよ。でも9回目に一番奥の棚から凄く綺麗な火色をしたお皿がとれたんですよ。窯自体は失敗だったんですけどね。それで10回目に9回目をヒントに焚き方を変えて臨んでみたら10回目は本当に良かったんですよ。だからいけるっと思って続けて行くことを決めて11回目に望んだんです。そしたらまた失敗（笑）神様って本当にいたずらやなーって思いましたね（笑）でもそこから、薪を数えるのを止めて、温度計を見るのも止めて、作品を見る事にこだわる様にシフトしていったんです。そうするとだんだんいい物がとれるようになってきましたね。

。

— 篠原さんがこれから挑戦していきたいことはありますか？

信楽の土の面白さを僕もまだ全てを分かり尽くせている訳ではないんです。まだまだ見たことのない素材っているのがいっぱいあるんです。始めに話したお茶碗に向いている土なんて土山じゃない、全然違うところから採れた土だしね。まだまだ活かせていない土を使っていくところまでだいぶ土に対する理解度も上がってきたと思うので、それを焼いてちゃんと良い物にしていきたいですね。じゃないとそろそろ死んじゃうんで（笑）まだまだ見えていないものも沢山ありますし、まだまだ陶芸が面白い最中なんで今死にたくないーていつも思っています。

信楽焼って僕にとっては本当に新しい事だと思っているんです。

特に僕はよそから来た人間だから、アメリカ人が思う感覚と同じで、信楽の土を使ってこの穴窯をつかって、釉薬を使わずに、こんな色が出せる、こんな景色が出せる。これってめちゃくちゃ面白いじゃないじゃないですか。そしてまだまだ探求されつくされていない。だから僕は自分がしている事は最先端の新しい事だっという感覚でいますね。



桃青

(写真：篠原さんの工房入り口にて)

篠原さんの独占インタビューいかがでしたでしょうか？

篠原さんが抱く信楽の土に対する思いというものは想像を遥かに超えるものでした。

そんな篠原さんの個展は2月4日(金)から2月26日(土)まで桃青京都ギャラリーにて開催されます。

熱意ある作品の数々を是非お楽しみください。

©2022 Tosei Kyoto Gallery. All Rights Reserved.